



誠実な生き方



裏庭でのできごと

けんじ
健二だいすけ
大輔ゆういち
雄一

チャイムが鳴り、給食時間が終わった。

食器を片づけると、校庭に向けて、みんな一斉に飛び出
ていった。健二は、サッカーボールをボール箱の中から取っ
た。

「健二、裏庭でやろうぜ。」
だいすけゆういち
大輔と雄一が誘った。

「ええっ、裏庭はまずいよ。」

健二けんじはそう答えてはみたものの、

「またこの前みたいに、先輩せんぱいにボールを取られたらどうする

んだよ。」

と大輔だいすけに言われては、返す言葉がなかった。

三人で体育館の裏の「裏庭」に行くと、さすがに誰もだれいなかった。

とつぜん、大輔だいすけが「あつ。」と声を上げた。

「ほら、ほら、あそこ。」

大輔だいすけが指さす方を見ると、一匹いっぴきの猫ねこが、物置の軒下のきしたにある鳥の巣しんにゅうに侵入しようとしていた。巣の中には、まだ生まれて

間もないひなが見えた。

（ああっ、どうしよう。）健二けんじがそう思うやいなや、雄一ゆういちがボールを猫めねこがけて投げていた。猫は、ボールに驚おどろいて逃げた。しかし、次の瞬間しゆんかん、ガシャーンという音がした。

雄一ゆういちが投げたボールが物置の窓に当たり、ガラスがはじけた。

「雄一ゆういち、よく助けたな。」

「でも、どうしよう。」

「しかたないだろ。ひなを助けようとしてやったことなんだから。先生に報告しに行けばいいよ。」

だいすけ
大輔は、ガラスを割ったことなどぜんぜん気にしていない
様子だった。

「じゃあ、先生に報告してくるよ。」

ゆういち
雄一は職員室へ行くつもりとした。



ゆういち
「雄一、そんなのあとでいい

よ。俺たち、ひなの命を救う

という、いいことしたんだぜ。

少しぐらい遊んでも罰は当た

らないぜ。」

だいすけ
大輔は、ボールを蹴りなが

ら、そう言った。

「いや、今行ってくるよ。」

雄一は、大輔を振り切って職員室へと向かった。残された

健二は、ガラスの片づけを始めようとした。

「健二、ちよつとだけやろうぜ。」

大輔は、健二に向けてボールを蹴ってきた。二人は初め、

軽く蹴っていたが、距離をとって強く蹴り始めた。そのうち

健二が蹴ったボールが、さっきの物置の方に飛んでいった。

（しまった。）と思ったときには、ガシャーンという音がして、ガラスが割れてしまった。見ると、さっき割ってしまったが

ラスの隣となりのガラスが粉々に飛び散っていた。

(どうしよう……。) 健二けんじは、そう思った。

そこに雄一ゆういちが松尾まつお

先生を連れてきた。

「先生、ここです。」

雄一ゆういちは、物置の窓

を指した。

「ひなが猫ねこにとられ

そうになったので、慌あわててボールを投げてしまったのです。」

雄一ゆういちは、事情を説明し始めた。



「先生、雄一^{ゆういち}はひなを助けようとしてやったことなんです。お

かげであのひなが助かったんです。許してやってください。」

大輔^{だいすけ}がすかさずそう言い添^そえた。

「どうも、すみませんでした。」

雄一^{ゆういち}は、ふかぶかと頭を下げた。

「よし、わかった。けがをしないようにして、ガラスの破片

を片づけておくように。終わったら、雄一^{ゆういち}は、職員室へ来る

ように。」

そう言い残して、松尾^{まつお}先生は職員室^{もど}に戻っていった。

「おい、どういふことなんだよ。ガラスが二枚割れているじゃ

ないか。俺おれがさつき割ったガラスの隣となりの、あのガラスはいつ
たいどうしたんだよ。」

雄一ゆういちは、大輔だいすけに言った。

「俺おれじゃないぜ。おまえが職員室に行ってから二人で遊んで

いたら、健二けんじがガラスを割っちゃったんだよ。」

大輔だいすけは、そう説明した。

「健二けんじ、おまえ、やっちゃったのかよ。」

雄一ゆういちは言った。

「ああ……。」

健二けんじは、力なく答えた。



「でも、俺おれがうまく言いってややったから、そんなにきおこつく怒おこらないかな。そんなに冷ひやたいこと言いうなよ。友達じゃないか。」

「なんだよ、汚きたねえなあ。二人でややったことを俺おれの割わったガラスに便乗べんじやうさせて。おまえら、調子よよぎぎるぜ。」

雄一ゆういちは憤慨ふんがいしているよ

ううだだった。

大輔^{だいすけ}は、そう言う^{だいすけ}とドリブルをしながら、校庭の方へ行^{だいすけ}つてしまった。

残された二人の間には気まずい^{ふんいき}雰囲気^{ただよ}が漂い、無言のままだった。昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴った。

五時間目の授業は好きな英語だったが、健二^{けんじ}はぜんぜん身が入らなかつた。

授業が終わり、サッカー部の練習に行^{だいすけ}つて、大輔^{だいすけ}に会^{けんじ}つた健二^{けんじ}は、「僕^{ぼく}、先生^{せんせい}に言いに行^{けんじ}こうと思うんだ。」と言^{だいすけ}つた。

「いいよ、そんなこと。あの場で済んだことなんだから。」

「そんなこと言ったって……。」

健二はあとの言葉が続かなかった。

「いいか。俺を出し抜いて先生のところになんか行くなよ。」

俺の立場が悪くなるじゃないか。」

大輔は、ボールを持って健二から離れていってしまった。

健二は、練習が終わっても気が重かった。

健二は、足取りが重いまま家に向かった。家に帰っても何もする気が起きなかつた。ベッドに横たわり、天井を眺めな

がら何度も自問自答した。でも、どうしたらよいのかわからなかった。もやもやした気持ちでベッドから立ち上がった。すると、目の前に置いてある鏡に自分の姿が映し出された。その姿を眺めながら、健二は考え続けた。

(僕は、僕自身はどうしたいんだろう……。)

そう思うと、もやも

やしていた気分が晴れ上がってきた。そしてそのとき、ある決心をした。



169-1

168-3

③1 裏庭でのできごと



次の日、健二は学校に行くと、
 雄一に言った。
 「僕、やっぱり松尾先生のところ
 へ行ってくるよ。」
 「おい。大輔は……。」
 雄一は、大輔のことを気にして
 いるようだった。健二は首を横に
 振ると、一人で職員室へと向かっ
 た。

『中学校 読み物資料とその利用―主として自分自身に関すること―』

文部省による

絵・いなとめまきこ

169-3

③1 裏庭でのできごと

考えてみよう



次の日、健二^{けんじ}を職員室へ向かわせたものはなんだったのだろうか。

プラスワン
自分に+1



自分で自分の態度を決めなければなら
ないとき、考えなければならないこと
は何かをまとめてみよう。